

# 北海道園芸研究談話会 会報原稿作成要領

## 書式について

会報原稿は、1 課題につき文章ページ 1 枚、図表ページ 1 枚の合計 2 枚とする。原稿は必ず A4 用紙縦に片面印刷する。手書き原稿は受け付けない。

文章ページ、図表ページともに、余白は上・左右が 25mm、下が 30mm とする。フォントは、課題名のみゴシック体とし、本文その他はすべて明朝体とする（半角英数字を含む）。また、P 明朝体は用いない。本文の文字サイズは 10～10.5 ポイント、1 行字数は 45 字（全角）、行数（課題名・発表者名の行を含む）は 45 行を基本とする。句読点は「。」および「、」を用い、「. 」および「, 」は用いない。

なお、北海道園芸研究談話会のホームページ <http://www.haming.net/engei/danwakai/> に MS Word および一太郎の様式があるので、これをダウンロードして利用するとよい。提出原稿の本文・図表は、そのまま（原文）のサイズで白黒オフセット印刷されるので明瞭な原稿の作成に努める。

### (1) 課題名

課題名は申し込んだ発表課題名と一致させる。

作物名（カタカナ）、用語は園芸学会に準ずる。（×畦→○畝、×は種→○播種、×ほ場→○圃場 etc.）後年、文献として探しやすい、分類しやすいタイトルをつけるよう努める。

### (2) 副題

副題が必要であれば 35 字以内で次行に入れる。

連報形式の場合は「（第○報）△△□□について」のように、全巻のうちどの部分を発表するのかわかるように副題を付ける。

### (3) 発表者氏名および所属

発表者名および連名の場合の順序は、申込時のものと一致させる（研究発表要領参照）。

連名の場合は、発表者氏名の前に上付き文字で○を付ける。

外国人の氏名表記は漢字またはローマ字を用い、発音を元にしたカタカナ表記は使わない。

発表者が 2 名以上で所属が異なる場合は、氏名の後に番号（全角文字の数字の上付き文字）を付け、括弧内に番号順（半角数字に半角ピリオド）に記載して対応させる。

所属は○○農試、○○セ（センター）、○○大農、○○（株）のように略記する。農業改良普及センターは○○（本所名）農改□□（支所名）とする（例：空知農改空知南東部）。

### (4) 導入部でよく用いられる文型の例

「…を目的として…を調査した。」、「前報では、…について述べたが、今回は…を…したのでその結果について報告する。」、「…については問題点が多い。そこで、…について検討を行った。」、「…が望まれている。したがって、本研究では…を…した。」、「…は…であることが知られている。しかし、…であるので、本研究は…を明らかにしようとしたものである。」

### (5) 【材料および方法】でよく用いられる文型の例

「品種‘えびす’を用い、○年○月○日には種し、○月○日に定植した。施肥量は…とした。」、「…に植栽されている○年生のリンゴ‘ふじ’から○年○日に果実を採取した。」、「…から…を選び、材料として用いた。」、「…は…になるように設定した。」、「培養基には…として…を用いた。」、「…のパラフィン切片を作り、…で染色して、…を観察した。」、「…の生長量を毎日調査した。」、「調査項目は…、…及び…である。」、「1 区 5 株で 3 反復とした。」、「…を定量し、…を…として、mg / kg で表示した。」

※試験・調査年次、場所、耕種概要（品種名、施肥量、定植期、収穫期 etc.）、調査手法等を記述する。

(6) 【結果】でよく用いられる文型の例

「…は…であった。」、「…の…が認められた。」、「…が…に及ぼす影響を第○図に示した。」、「第○表に示すように…は…が最も…である結果となった。」、「…は…とほぼ同様の傾向を示した。」

(7) 【考察】でよく用いられる文型の例

「…が明らかとなった。」、「…は…であると考えられる。」、「…であることが示唆される。」、「…することが可能と思われる。」、「…の検討が必要である。」、「…については更に調査中である。」、「今後…する予定である。」

(8) 表、図、写真の作成について

- 1) 会報はモノクロ印刷となるため、表、図、写真は発表時に作成したカラー版をそのまま用いずに可能な限り白黒色で作成し、やむを得ない場合であっても、モノクロ印刷でも見やすいように配色を工夫する。
- 2) 写真はモノクロ印刷で判別可能な鮮明さを確保できる範囲でファイルサイズを小さくしてから貼り付ける。
- 3) 図表や写真を余白にはみ出して貼り付けないように留意する。
- 4) 図と写真の番号は「第○図」とつけ、表は「第○表」とする。「図○」、「表○」、「写真○」としない。
- 5) 図表タイトルは内容を十分に表すように、「Aに及ぼすBの影響」等、調査事項とそれに関与した(試験した)要因とし、「○○試験結果」「収量」のような調査項目のみの記載としない。
- 6) 表タイトルは、表本体の上側に配置し、図タイトルや写真タイトルは、図や写真の下側に配置する。表の脚注および図の説明文は、表や図タイトルの下側に配置し、フォントサイズをやや小さくする。
- 7) 表中の縦罫線や斜め線は原則として使用せず、横罫線も極力少なくする。縦・横欄の見出しは脚注を利用して明白な表現とする。
- 8) 図表中の文字(数字および○、□など一般的記号を含む)を記入する際には、刷り上がり時に十分に読み取れる大きさで作成する。
- 9) 可能な限り統計解析を行った上で処理間差がある(無い)ことを述べ、図表中にアルファベットやアスタリスク(\*)などで示す。また、用いた検定法を本文か図表の脚注に記載する。
- 10) 掲載した表、図、写真は、「第○表に示すように…」、「…を第○図に示した。」、「…が認められた(第○図)。」などと必ず本文と対応させ、特に写真をカット的に用いたり、本文に記述のない表や図を掲載することはしない。

(9) 提出用の電子ファイルについて

校閲用に提出するファイル名は「課題番号+執筆者姓+作物名(またはキーワード)+初稿」(例:「花き01壘ユリ初稿.docx」「果樹02高梨リンゴ初稿.jtd」「野菜03那須台風被害初稿.doc」等)、原則としてワードあるいは一太郎形式で、本文と図表を別ファイルに分割しないで1つのファイルとする。

また、初稿提出後は校閲を受けるに従って「花き01壘ユリ修正稿.docx」「花き01壘ユリ第3稿.docx」「花き01壘ユリ最終稿.docx」などのように、版数がわかるファイル名とする。

なお、原稿の提出方法については、研究発表会当日に別途発表者に通知する。

(平成 27 年 12 月 7 日)

課 題 名 ○○○ ⇒ (1)

副題名 (第○報) ○○○ ⇒ (2)

(1行あける)

○氏名<sup>1</sup>・氏名<sup>2</sup>・氏名<sup>1</sup> (1. 所属、2. 所属) ⇒ (3)

(1行あける)

導入部であって、「緒言」、「まえがき」、「はじめに」などの見出しの付く部分である。ただし、項目名は入れない。研究の目的、動機、経過、問題点、観点などについて書く。

⇒ (4)

**【材料および方法】** 材料については、作物〔植物〕名（必要と思われる場合は学名も）、品種名（‘○○’と表記する）、由来、樹齢、栽培〔採取〕の場所・時期方法などを書く。種類の多い場合は表で示してもよい（「用いた材料は第1表に示すとおりである。」などと書いておく）。材料に相当するものがない場合は、項目名を「調査方法」、「測定方法」などとする。方法については、実験条件、調査・測定の項目・方法などを書く。実験・調査の内容が2つ以上に分かれている場合は、I. ○○：……、II. ◇◇：……のように分けて書いてもよい。

⇒ (5)

**【結 果】** 結果と考察をまとめて、「結果および考察」としてもよい。

実験・調査の内容が2つ以上に分かれている場合は、I. ○○：……、II. ◇◇：……のように区分して書いてもよい。データが図表に示されている場合は、図表と対応させながら、「第○表に示すとおり、……」、「……の結果を第○図に示した。」、「……は……であった（第○表）。」のように書く。「結果」にはデータから確実に推定できることまでを書き、推測、推論、想像などを含めない。

⇒ (6)

**【考 察】** データを解析し、推測・推論を加え、さらに、必要であれば筆者の過去の研究成果や他の研究者の報告中の結果・結論と比較検討して得られた判断について書く。実際面への適用・応用の可能性、更に検討を要する点、この報告の内容に関連する今後の研究計画などについて書いてもよい。

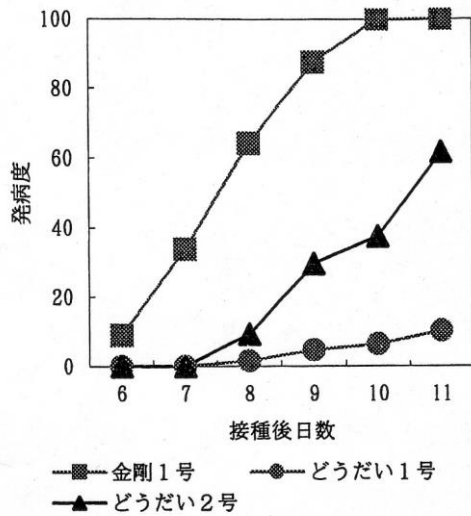
⇒ (7)

# 図表見本

第1表 摘心が草高に及ぼす影響

	実験1		実験2		実験3	
	摘心前	収穫時(8/7)	摘心前	収穫時(8/15)	摘心直後	収穫時(8/21)
摘心なし	24.5±2.2	41.8±4.2	37.8±3.8	58.3±6.6	40.8±5.3	56.1±7.9
刈り払い機摘心	24.8±2.4	34.6±4.2	—	—	30.7±3.1	41.2±5.2
徒手摘心	—	—	37.9±4.3	58.1±5.2	38.7±4.4	51.0±6.7

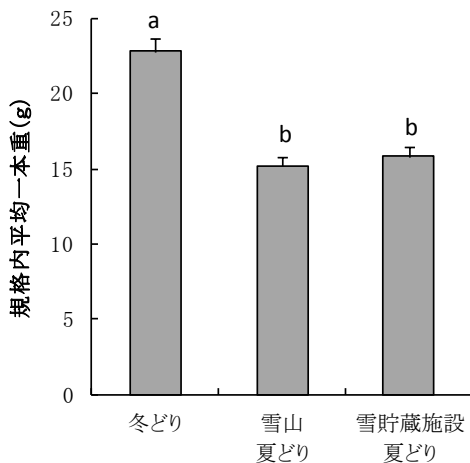
数値は平均値(cm)±標準偏差 (n=120)。



第1図 メロンつる割病(レース1,2y) 接種検定における発病度の推移



第2図 発育初期におけるアスパラガス花の縦断面(上段) およびその葯部分の拡大図(下段)



第3図 根株の雪利用長期保存が若茎重に与える影響

縦線は標準誤差(n=3)を示す。異なる文字間には Tukey の多重比較により1%水準で有意差あり。

第2表 定植時の温度及びマルチフィルムが機械定植苗の活着に及ぼす影響

定植時間帯	マルチフィルム	健全 (%)	生存 (%)	枯死 (%)		
				マルチ下	マルチ上	計
朝 (9:00~9:30)	光崩壊	100	100	0	0	0
	農ポリ	92	99	1	0	1
昼 (13:00~13:30)	光崩壊	100	100	0	0	0
	農ポリ	65	75	18	7	25
分散分析 <sup>z</sup>	温度	*	**	*	***	**
	マルチ	**	**	**	***	**
	温度×マルチ	*	**	*	***	**

<sup>z</sup> 株率(%)を逆正弦変換した値によりF検定、\*:5%、\*\*:1%、\*\*\*:0.1%水準で有意